子育てにおける夫婦の連携(5)

お父さんの子育て

田野　直

我が家は五人家族です。私、女房、三人の男の子。

私は今年四十五歳、団塊の世代に近い年代です。ですから「男は仕事に生き、女は家を守る」という感覚が強く、私も家事は一切しません。ですけど一応、子どもたちの教育担当と言えば格好はよいのですが、子どもたちと遊んだり、子どもの成長の様子を観察して話したりすることが役割になっています。

女房は今年四十歳、俗にすき間世代と呼ばれています。私よりもっと年下の男と結婚していれば、団塊の世代の夫に引っ張られることなく、もっと自由に自分の生き方が選択できたかもしれません。とにかく、女房の私や子どもに対する理解と協力にはありがたく思っています。

子どもたちは、長男は中一の「**タカ**」、次男は小五の「**ヤス**」、三男は小二の「**アキ**」。

長男の**タカ**は、勉強とクラブチームのサッカーとの両立でとても頑張っています。精神的にとても安定していて努力家です。**タカ**を見ていて面白いことは、大好きな

サッカーで完全燃焼した時ほど勉強に集中できることです。サッカーが休みの日は、ダラダラしていてダメです。

次男の**ヤス**は、今、これまでになく燃えています。スポーツに勉強に取り組んでいます。きっかけは先生です。五年になって若くて元気で、とてもよく子どもたちと遊んでくれる先生が担任になったからです。この先生は「ガッツ先生」と呼ばれ、ガッツを合言葉にクラスをぐいぐい引っ張っています。この先生のおかげで**ヤス**は意欲的で積極的に変わってきて、グチ・泣き言・言い訳がだいぶなくなりました。

三男の**アキ**、一番下の子のせいか、いつまでたっても可愛いいです。やんちゃできかないところがありますが、明るく伸び伸びとおおらかに育っています。

ここまで家族紹介、親バカたっぷりの家族紹介をしてきましたが、我が家の子どもたちの子育てを思い出しながら振り返っていこうと思います。

長男の**タカ**が幼児だったころ、初めての子育てということで、女房と話しあって、子育てのポリシーみたいなことを決め、子育てしようとしたわけです。

ベースとしては、一つめに子育ては六歳までが勝負、何とかなるのが十歳まで。これは私の本能的確信です。中学・高校で子どもたちはそれぞれ自立していくと思うのですが、自立の芽を幼児期に親子ともども理解しあって育てていくことは大切なことであるし、後々子どもにとって大きな財産になります。

二つのベースは男の子は父親が育てなければいけないということです。これも私の本能的確信です。誤解されると困るのですが、父親でないと男の子に教えられないことが数多くあるということです。男の子の成長の曲がり角では必ずお父さんが必要になってくるはずです。

ポリシーの一つめは、「小さいうちから自分のことは自分でやらせよう」。これは当たり前のことですが、実際はむずかしい。今までお母さんがやってくれたのに、自分でやるとなると、初めのうちはなかなかできない。

お母さんの方では子どもの様子を見て、なんでこんな簡単なことができないのと思います。そこでお母さんが手助けしてはダメです。じっと我慢するのです。子どもは自分の力でできたとき、「お母さん、ぼくできたよ」と嬉しそうに言ってくれるはずです。

ポリシーの二つめは「子どもをいじらない」。これは一つめとほとんど同じ意味です。まず子どもをペット化しないで子どもでも一人の人間として受け入れようということです。これもむずかしいことです。自分の子は可愛いいからできるだけのことをしてあげようという親の勝手な思いが、子どもが自分のことは自分でやるという自立のチャンスを奪い続けるのです。このことは子どもにとって悲惨なことになるのです。

ポリシーの三つめは、「ガンガン外遊びをさせろ」。子どもの運動神経というのは幼児の訓練で決まってくる。これも私の本能的確信です。幼児期に思いっきり体を動かした子はそれなりの基礎体力が身につく。逆に幼児期に体を動かしていない子は小学校に入って動きのバランスが今一つ悪い。私自身、小学校でサッカーのコーチをよくしますが、最近の子どもたちは体は大きいですが、前後左右の動きがモタモタしていると感じます。

我が家は三人の男の子。動きのとろい子にしたくなかった。頭と体がとろいといじめの対象にされるので、元気でたくましい子にしたかった。そこで幼児期は体力をつけることに重点をおきました。

こう書いてきますと誤解を招いてしまう恐れがあるのですが、「外遊び」には体力づくりの他に大きなメリットがあります。

子どもたちが、自分のしたい遊びを選び、自分たちで考えて遊びの形を変えていくことです。そしてなにより自分の遊びにとことん熱中することです。

ボール遊び、かけっこ、鬼ごっこ、どろ遊び、花取り、木の実集め、いろいろな遊びがあり、それぞれの遊びから自分たちでルールを出しあって遊びを発展させていく、そんな遊びを繰り返しながら、知恵とか集中力とか思考力とか体力を養っていく。そこは、親が介入しな

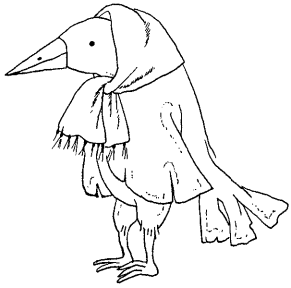
い方が望ましい子どもたちだけの世界です。

ポリシーの最後に、言葉にすると恥ずかしいのですがこういうのがありました。「親は子どもに対して責任は持つが、子どもは一人の人格としてたとえ幼児であっても認めなければならない」。これは正直言って意味不明なのですが、親子関係は平等でなければならないというような意味合いです。

子どもには子どもの世界があるはずです。子どもの世界を否定するなり肯定するなり、初めに親が子どもの世界を受け入れなければならない。そこで初めて、親子の平等関係が生まれるんじゃないかと思うわけです。難しくとられると困るのですが、毎日の子どもの様子をよく観察していれば、子どもの発信しているメッセージを受け取れるのではないかと思います。

今まで我が家の子育てのベースとポリシーについて書いてきたのですが、次にそれでどうしたかについて話を進めたいと思います。

まず結論から。普通の幼稚園に行かせませんでした。しかし幼稚園らしき所へは行かせました。それは「駒沢おひさま会」というところです。女房が四歳時の**タカ**を連れて駒沢公園へ遊びに行って、中年のおじさんが四十人位の子どもたちと遊んでいる光景を見たらしいのです。女房は好奇心が旺盛なもので、気になって聞きに行



き、まあとにかく**夕力**は入会したわけです。

「駒沢おひさま会」には、一人のプレイリーダーと母親が交代で当番となって、子どもたちの面倒をみるというか保育をするわけです。

保育日は週五日、駒沢公園を拠点に世田谷プレイパーク、多摩川にも時々足を伸ばします。

保育内容は外遊び中心、雨が降れば児童館であばれたり、絵本を読んだりしますが、毎日が遠足みたいなものです。

合宿、遠出が多いのが特徴で、八月には父子合宿、十月には保育者合宿、二月にはさよなら合宿（母子合宿）、三月には多摩川でキャンプ合宿、その他年二回の登山、冬の江の島等々。

女房が駒沢公園で見た中年のおじさんがプレイリーダーの竹内さんで、彼は団塊の世代の人間で、母親たちもまあ団塊の世代の人間が多いわけで、とにかく頑張るわけです。子どもたちにとっては、竹内さんはお父さん代わり。それに竹内さんもこたえて、子どもたちのお父さん役を頑張ってするわけです。それで子どもたちにも頑張らせるのです。高い木に登らせたり、子どもの身長以上の高さの石垣を登らせたり、子どもといっしょになってラグビーのまねごとをしたり、とにかく子どもと結構夢中になって遊んでいました。

母親たちは母親たちでエネルギーがありましたね。やはり団塊の世代だと。

駒沢おひさま会は、自主保育です。自主とは自分たちの手で、自分たちの意志で、自分たちのお金で運営されています。大変なエネルギーが求められます。幼稚園に預ければ楽だと思いますが、あえて小学校に上がるまでは自分の手で手づくりの教育を子どもにしてあげたいという強い気持ちがあったからできたことだと感心させられます。

駒沢公園の保育は朝の散歩から始まります。駒沢公園は緑が多く、さまざまな草花があり、四季の変化があります。子どもたちはゆっくりと約一時間位朝の空気をすいながら、公園内をほぼ一週散歩します。公園内にはい

くつかの児童公園があって、そのなかから子どもたちが行きたい児童公園に行きます。そこで二時間しっかり遊びます。男の子は男の子、女の子は女の子、遊びがちがうせいか分かれます。そしてお弁当の時間、午後からもうひと遊びで保育は終わります。その後、ミーティング。プレイリーダーを囲んで、当番のお母さん、子どもを迎えにきたお母さんで、今日の保育の子どもたちの様子を意見交換をします。

駒沢おひさま会のよいところの一つめは、自分の子どもが小学校にあがるまで子どもとふれあいをもち続けられることで、親子の心のキズナが強くなることです。もし幼稚園へ行かせていれば子どもの幼稚園での様子は見えづらいと思います。

二つめは、他の子どもの成長の様子が観察できるので、自分の子どもの成長の様子をより客観的に、より具体的に理解できます。このことはとても大切です。子どもの状況を正しく適切に理解していないと、子どもに無理な要求、ムダな要求をしてしまうことになります。

三つめは、他人の子どもに対しても自分の子どもに持つような愛情がわいてくることです。これはお母さんたちにとって、最も素晴らしいことだと思います。お母さんたちの心を一回りも二回りも大きくします。駒沢おひさま会というコミュニティの団結がますます強まっていきます。

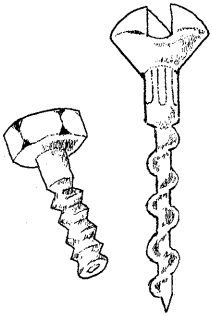
四つめは野外保育の素晴らしさです。子どもが自然の中にときはなたれ、自分の好きな遊びに熱中することで、自然を肌で感じたり、思いっ切り体を動かしたり、遊びの中から知恵や好奇心を養っていけることです。

話は変わりますが、駒沢おひさま会には素晴らしい年中行事があります。それは「父子合宿」です。少しふれてみたいと思います。

「父子合宿」とは、その名の通りお父さんと子どもたちだけの合宿です。もちろんプレイリーダーも参加しますけど。場所は、群馬県沼田からちょっと入った川場村の農家をお借りして、夏休み最初の土日にかけて二泊三日、すべてお父さんの手づくりの合宿です。

川場村は自然がたっぷりあって、山、緑、川と子どもたちの遊び場にもってこいです。

毎年、山歩きをしたり、川遊びをしたり、お父さんも子どもも楽しんでいます。それ以上に楽しいのは、ご飯づくりもお父さんがやることです。火おこしの上手なお父さん、料理の上手なお父さん、その間子どもたちと遊ぶのが得意なお父さん、見事な分業体制で行われます。夜のミーティングもちゃんと行われます（早い話、夜の飲み会です）。いろいろな話が出ます。子どものこと、子育てのこと、おひさま会のこと、会社・仕事のこと、話題はつきません。疲れたお父さんから子どもといっしょに寝はじめます。毎晩遅くまで飲み明かします。すると早朝から子どもが起きてきます。お父さんがちょうど深いねむりに入ったころ、子どもたちの騒々しさに起こされ、そのまま朝食の用意に入ります。食事が一回終わるたびに乾杯です。昼は、川遊びや山歩き、すいか割りもします。夜は、花火大会をちゃんとやります。結構ハードに子どもたちのために尽くします。それと夜のミーティング。子どもたちが楽しいと言ってくれるのがせめてものなぐさみです。お父さんはもうヨレヨレになって東京に戻ってくるのです。それでもお父さんは「合宿は良かった」と言っています。父子合宿を通じて、お父さん同士のキズナが深まったり、他の子どもたちに対しても自分の子どもと同じ様な愛着を感じはじめ



ます。ですから他の子どもの名前も平気で呼びすてです。

十月に〝雑居まつり〟というのがあるのですが、お母さんとは別にお父さんだけで出店を出します。ある年は前夜にザリガニを二百匹つかまえて来て、子ども相手に売ったことがありました。

秋の山登りを、毎年日曜日にしますが、父子合宿のメンバーはほとんど参加してくれます。下山後の反省会を楽しみにしている人が多いのですけど。とにかく父子合宿がおひさま会のお父さんの活動のきっかけとなり、パワーの源泉になっているように思います。おひさま会がなければなかなかできないユニークなイベントのように感じました。

我が家の三人の男の子は、このような「駒沢おひさま会」を卒会して、小学校へ入学していきました。おひさま育ちは小学校に入って奇妙なふるまいとユニークな言動が目立つと言われていましたので、うちの子に限ってという思いはありましたが、多少の気がかりはありました。それも取りこし苦労だったようです。何の問題もなく、スムーズに小学校にとけこんでくれました。

子どもたちが小学校に入ってからは、これという子育てはしてませんが、三つのことをしています。

一つめは、スポーツを何かやらせたいという思いがあって、サッカーをしています。土日の午後、小学校の校庭が使えるので子どもたちといっしょにサッカーをしています。夏休みにはできる限りプールに行って泳いでいます。

二つめは、二週間子どもたちだけのキャンプに参加させていることです。このキャンプはおひさま会のプレイリーダーをやめた竹内さんが中心となり、中学生・高校生がスタッフとなって、三十人位の小学生の面倒をみてくれます。しかし、子どもたちは自分の食事は自分でつくりますし、後かたづけも自分でします。自由時間はめいっぱい遊べます。川へ行ったり、くぎさしなどのゲームを楽しんだり、夜は毎日キャンプファイヤーです。二

週間のキャンプを終えて帰ってきますと、いちだんとたくましくなってきます。子どもたちにとって自立するよいチャンスになっているようです。それと、親の目から解放されることもある期間必要な気がしました。子どもたちはたえず親のまなざしにさらされている。保護してくれる目、批判の目、チェックされる目、とにかく親のまなざしに子どもたちの意識がいきます。そういうことから解放されて、親の存在すら忘れて、自然の中で自分のことは自分でするという体験は、子どもたちを一回りも二回りも成長させることを強く感じます。

三つめは、学校の授業参観です。これは学校の決められた日に行くのでなく、土曜日に一人の子につき年一、二回行きます。家庭での子どもたちの様子は毎日見ていますからわかりますが、学校ではどんな様子かわからないので私が見に行きます。子どもたちはいやがりますが、学校での様子を知らないわけにはいかないのでやはり行きます。

あとは、映画をよく見せます。最近の子どもたちは本をあまり読まないので、子どもが主人公の子ども向けの映画を探します。邦画でも洋画でも子どもを題材とした映画は結構新作ででています。私が映画好きなのでそうしていますが、映画であればよく見てくれます。字幕がスーパーであってもだんだんストーリーが読めてくるようになります。それが何だと言われると困るのですが、子どもたちに何かのプラスになると思ってそうしています。

以上が私の子育てですが、子どもたちにはそれぞれ自分の世界があるわけで、その世界で問題のない限り、自由にさせたいと思います。幸いにも三人とも健康に恵まれ、素直で優しい子に育っています。とてもありがたいことだと思います。とにかく何の問題のない子を三人も授かったことに深く感謝し、今後の成長を親がじゃますることなく、しっかりと見守っていきたいと思います。

とりとめのない文章になってしまいましたが、このへんで終わりにしたいと思います。

（東京・世田谷区在住）